

521 hyperthecosis症例とその内分泌的検討

宮崎医大

永井公洋, 宮川勇生, 大重智広, 坂田師隣,
小池弘幸, 森 憲正

【目的】非腫瘍性の卵巢腫大疾患は多嚢胞性卵巢症候群(PCO)とhyperthecosisである。報告例の多いPCOに比べhyperthecosisは欧米においても報告は少ない。今回我々は、我国で最初の報告例と思われるhyperthecosisの症例(17歳、未婚)を経験し、内分泌学的検討を加えたので報告する。
[成績と経過]稀発月経、著明な肥満と男性型多毛を認めたが陰核肥大はなかった。基礎体温は低温、一相性で軽度肝障害と糖尿病を認めた。LH 35.6、FSH 8.7mIU/ml、progesterone 0.9ng/ml、estrogen E_1 75.1、 E_2 56.7pg/ml、testosterone 1.6 μ g/ml、androstendione 4.3ng/mlで高insulin血症も認めたが、他のホルモン値は正常であった。ACTHとcortisolの日内変動を認め、LH-RH負荷試験ではLH過剰遅延反応を認めたが、その他の各種負荷試験は正常反応であった。DEX抑制hCG刺激試験で副腎は抑制され、hCG投与により血中androgenは上昇、尿中17-KS値は抑制されPCOとは異なる成績を示した。超音波、CT検査では副腎は正常大で軽度の卵巢腫大を認めた。開腹時卵巢はやや腫大、黄体を認めた。両側卵巢部分切除時卵巢静脈中testosteroneは2.4 μ g/mlであり、末梢血中値も術後8時間目には0.4 μ g/mlとなった。組織学的には白膜肥厚や卵胞腫大を認めず、間質にtheca cellの増生を認め、同部位にoil red陽性の脂質を証明し、hyperthecosisと診断した。[結論]現在までに国内ではhyperthecosisの報告例はなく、本症例は内分泌学的検討までなされた最初の報告例である。PCOと診断された症例中にはhyperthecosisも含まれていると考えられ、本症例の報告は、これら2疾患の混同に注意を喚起するものである。

522 蛍光抗体法による抗ヒト・パルボウイルス抗体検査法の確立と妊産婦の抗体保有率

東北大, 宮城県保健環境センター*

東北大細菌学**

八重樫伸生, 岡村州博, 浜崎洋一,
矢嶋 聰, 白石広行*, 菅村和夫**

【目的】ヒト・パルボウイルス(HPV/B19)は、妊婦に感染すると流産や胎児水腫を誘き起こすことが報告されている。しかし、HPV/B19の簡便かつ鋭敏な検査方法がないためその感染の実態はほとんど解明されていない。間接蛍光抗体法による抗HPV/B19抗体測定法を確立し、妊産婦の抗体保有率を明らかにすることを目的とした。【方法】胎児肝より赤芽球を分離し、HPV/B19を感染させた。感染後4日目の細胞を使い間接蛍光抗体法で血清中のIgG抗体とIgM抗体を測定した。【成績】1. HPV/B19の感染時期が明確な患者の抗体価の推移はIgG抗体は1年以上、IgM抗体は約2カ月間検出できた。2. 当院で妊婦検診を受け生産児を得た正常妊産婦329例中IgG抗体陽性者が109例(33.1%)、妊娠初期に自然流産した妊婦23例中IgG抗体陽性者が9例(39.1%)であった。3. IgM抗体陽性者が7例あり、6例が正常分娩、1例が流産であった。4. 非免疫性胎児水腫の妊産婦15例中IgG抗体陽性は4例であったが、IgM抗体陽性例はなかった。

【結論】1. 本検査法は使用する抗原が微量で済むこと、簡便かつ鋭敏であることなどからHPV/B19感染症を解明する有力な手段となりうる。2. 正常妊産婦の抗体保有率は33.1 $\pm$ 5.1%と推定される。3. 妊娠中の感染は流産の誘因となりうる。4. 非免疫性胎児水腫の症例でIgM抗体陽性例がなかったが今後さらに症例を増やし検討する必要がある。(胎児肝の使用に際し、両親に研究内容を充分説明し許可を得るとともに本学倫理委員会の承認を得た。)